



学校だより



令和7年1月31日
2月号
調布市立第一小学校
校長 樋川 宣登志

<http://www.chofu-schools.jp/chofu-1sho> TEL.042(481)7636

「子育て」は「親育て」

副校長 山崎 清香

私事にはなりますが、先月長女が20歳の成人式を迎えました。我が子が心身ともに成長してくれたことがとても嬉しいのはもちろん、今までを思い出すと、子育てをしたことで私自身が「親育て」をさせてもらったと感じています。

振り返ると自分の子育てに悩み、迷ったこともあり、自分の子育てがこれで良いのかと、育児本を読んでいたこともありました。その本の中に「子育て四訓」があり、時々思い出していました。

子育て四訓

乳児はしっかり肌を離すな
幼児は肌を離せ、手を離すな
少年は手を離せ、目を離すな
青年は目を離せ、心を離すな

乳児期は、基本的信頼感を育むため、しっかりと肌をつけて守ること。幼児期は、自立に向かって子どもが思い通りに動いていても手助けをしていくこと。少年期は、ほぼ自分のことができるようになっていても、手を差し伸べられるように目を離さないでおくこと。青年期では、親の存在を疎く思うようにもなりますが、「いつもあなたの味方だよ。」と心で寄り添う人であること。それぞれの段階で、子どもが自立に向けて育っていく親(大人)の心得を教えてください。

小学校の少年期は、親は子どもとの関わり方を変え、徐々に手を放していくけれども目を離さないという姿勢を親が示すことで、子どもは自立に向かっていくのでしょ

しかし、いくら体は少年期になっていても乳児期に行われるべき肌と肌との安心感を必要な時期に与えてもらっていない場合は、安心して親を離れて行動することができない子どももいるようです。その場合はその子どもに応じた対応を行っていかねばなりません。

また、親御さんの多くは、我が子とのやり取りの中で、子育てに非常に悩むことも多いと思います。私もそうでした。我が子であってもいつもいつも愛情だけを注げるわけではありません。子どもに対する苛立ち・葛藤があり、「どうしてわかってくれないのか」という思いがあるはずです。これらのことを実感する機会は子どもの成長につれて少しずつ大きくなっていくかもしれません。しかし、こうやって悩んで、親も子どもと共に成長していくのではないのでしょうか。

小学校では、1年生から6年生がいる中で教員の児童に対する接し方や指導の仕方も変わってきます。この「子育て四訓」は、私たち教員にとっても教育活動を展開する上で、とても参考になる教えです。

本校の教育活動のアンケートにおいて「教職員は、保護者からの連絡や相談に親身になって対応している。」という項目で96%の保護者の方から肯定的評価をいただきました。引き続き、子どもと共に学ぶ姿勢を忘れず、教職員一同、教育活動を行っていきます。